

# 編年集成

内閣文庫	
番號	和 10362
冊數	48 ( 2 )
函號	150 2

内閣文庫			
五	四	三	和
〇	八	二	書
架	冊	號	類

内一三九七八號





武德編年集成卷之一

足利家十二代

人皇百六代

後奈良天皇

御諱 知仁

幕府源義晴卿

天文十一年

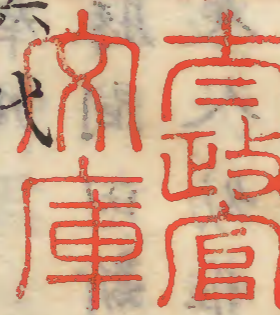
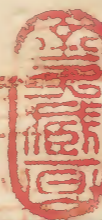
十二月

廿六日

清和天皇廿五世

參州額田郡岡崎ノ城ニ於テ

德川贈正二位大納言



附一二九七八號



廣忠卿ノ御嫡男

東照大神君御誕生有于時祥瑞多シ母公

ハ參州碧海郡刈屋尾州知多郡小川西城

主水野右衛門大夫源忠政ノ女也墓目ハ

石川安藝守源清兼御胞刀ハ酒井雅樂助

源正親是ヲ後ス御幼名ヲ竹千代君

ト稱シ奉ル

○是年勝間田新六政行江本國遠廣忠君

ニ仕フ是人幼稚ヨリ清康君ニ仕ヘ當

時參州寶飯郡牛窪ニ寓居スル所也

①政行天文十八己酉年ヨリ今川家ニ

屬シ遠州ノ内田久良美駿州ノ瀨名ヲ

領シ内田近江ト改稱ス今川氏真亡國

ノ後神君ニ仕フ

○今川治部大輔義元遠州城飼郡高天神

ノ城ヲ小笠原彈正ニ授ク

○當城ハ應永廿三丙申年今川範政是ヲ

築キ山内玄蕃ヲ以テ守ラシム文安三

丙寅年ヨリ福島佐渡同上總相續テ是

ヲ守リ文龜年中ヨリ小泉左近城主ト



成卜云々

天文十二癸卯年

正月大

○八日 猶月残テ晨ニ及フ

①西川如見カ曰月輪ハ遊輪ノ不同ニ  
因テ日輪ヨリハ纏度ノ差ヒ多キ者也  
ト雖或ハ史記ノ孝景本紀ニ所謂月止  
辰ノ間ニ出ルト或ハ此八日ノ月ノ晨  
迄残ルカ如キ大十ル差ヒハ有ヘキ理  
ナシ是真ノ月ニハ非スノ妖星ノ類ヒ

月ノ如ク成モノ地上漸クニ三十町ノ  
間ニ繫テ残月ト見ユルナラント云々

七月小

○十二日 水野右衛門大夫忠政率ス法

大長男下野守信元家督ヲ繼テ尾州小

川參州刈屋西城ヲ守ル

八月大

○廿五日 應仁以來天下擾亂シ殆ト瓜

ノ如クニ割テ豆ノ如クニ分ル慶遂ニ一

統ニ歸スヘキ氣運ニヤ島津修理大夫義



久力領國大隅ノ附庸種子島へ蕃船一艘  
貨物交易ノ為ニ入津シテ戰ニ臨テ互ニ  
衆ヲ亡シ勝敗速ニ決定スヘキ火炮ト云  
物ヲ携へ來ル此船ハ西洋歐邏巴ノ地方  
彼尔杜瓦尔國ノ商客夕リ通事ハ大明ノ  
五峰トイヘル儒生ヲ乗セ入津シケル島  
主兵部丞時堯彼夷ヨリ鍊炮ニ挺ヲ買得  
テ其技ヲ學ヘリ是實ニ本朝へ彼術ヲ  
傳フ權輿ナリ

○往昔中華朝鮮ニ毛炮術ヲ知ル者十

シ吾朝後柏原天皇永正十四丁丑年  
ハ大明ノ武宗皇帝正德十二年也漸ク  
佛郎機國ノ船彼國廣東ノ懷遠驛ニ入  
津シ其所ノ司ニ火炮藥劑ヲ添テ是ヲ  
授ル由顧應麟カ説也爾ヨリ後西蕃或  
ハ紅夷ヨリ中華へ火銃ヲ渡ス旨天工  
開物武備志通雅等ノ書ニ見ユル所ニ  
シテ朝鮮へハ天正十八庚寅年宗對馬  
守義智ヨリ彼國王ニ贈リシ事懲茲錄  
ニアリハ幡愚童訓及太平記ニ龜山

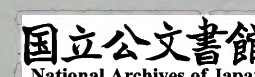




天皇ノ御宇文永十一甲戌年蒙古襲来  
シテ鍊炮ヲ發セシ事ヲ著ストイヘ  
今ノ炮術トハ異ニメ宋ノ世ニ  
旋風軍稍躡等ノ類十ル由新井筑後守  
君美カ本朝軍器考ニ詳ニ論ス是  
當家ノ事ニ非ストイヘ武門ノ要器  
吾國ニ渡レル濫觴ナレ公其大槩ヲ爰  
ニ著ス者ナリ  
猶又天文十三甲辰年ノ  
卷末ヲ考ヘ見ルヘシ

十月大

○朔日松平兵庫頭一忠率ス法諱玉是  
心淨金  
人ハ德川和泉守信光君ハ五世兵庫頭  
一宗カ嫡子ニメ長澤家ト稱ス  
○二日松平内膳正信定卒ス法諱詳是  
雄道喜  
人ハ德川出雲守長親君ノ二男ニシテ  
櫻井家ト稱ス  
附考メ云北條氏康ハ松山ノ城ヨリ小  
田原へ飯陳シ伊豆箱根兩所權現鶴岡  
八幡宮三島大明神へ名代ノ幣使ヲ詣





三河越表ニ於テ大利ヲ得シ拜禮ヲ述  
 テ雄劔蹄馬ヲ捧ケ猶又武運長久ヲ祈  
 レ小氏康ハ軍事ニ曉暢セルノミニ非  
 ス射術擊劍ニモ長シ風雅ノ道ニ通シ  
 テ秀逸ノ詠歌モ亦多シ今茲天文十一  
 年ノ頃及五月初旬ノ夕高樓ニ登リ山  
 野ノ景色ヲ瞻望シ木ノ間ノ月明ニ涼  
 ヲ逐テ興ヲ催シケルニ何處ニテ少野  
 狐來テ樓邊ノ培塿ニ止足シ數聲噓々  
 タリ近侍ノ士等是ヲ聞テ夏時ニ狐ノ

啼ルコソ凶ヲ示スノ兆タリ下田家ノ  
 諺ニ傳ヘテ歌讀十ニ非モ有下コソ承  
 レリ所詮弓ニテ射殺サレヤ十中申ケ  
 ルニ氏康取敢ス  
 夏ハキツ子ニ啼蟬ノカラコ口モ  
 才ノレオノレカ身ノ上ニ著ヨ  
 卜讀テ高吟シケルニ其聲ノ下ヨリ狐  
 ノ啼聲弱リ行テ忽ニ音絶タリ然レモ  
 形ハ其終立去スノ有力如クニ見エシ  
 ニ明ル朝若者儕彼培塿ニ行テ見レハ



狐空シク倒レ死シ居ケリ偕ハ是夜前  
ノ和歌ノ徳ニ因テ不祥ヲ己カ身ニ受  
シ者ナルヘシト皆人奇異ノ思ヲソ十  
シケル此事都鄙ノ若話ト成テ實ニ氏  
康ハ文武二道ノ將也ト世舉テ諷シア  
ヘリ其頃尾州武衛家ノ舊臣織田備後  
守信秀信長父ハ武勇ニ勝レタル士大將  
ニテ威ヲ近國ニ發シケルカ熟田ノ北  
古渡ニ新城ヲ築キ移徙ノ賀儀トソ所  
從ノ者ヲ集メ酒宴ニ刻ヲ移サレシ序

二當時諸州ノ大小名ノ批判アリシニ  
水野帶刀左衛門忠廣北條家ノ武畧ヲ  
沙汰セシハ近頃北條氏康詠歌ノ徳ニ  
依テ如斯ノ由トテ件ノ事實ヲ演夕リ  
シニ信秀耳ヲ傾ケ聞テ足下ノ詞ノ如  
キハ氏康武義ニ長セル人傑ニテ六義  
ノ道左ハカリノ奇特アル事末世珍シ  
キ守將也然ラハ當時兩上杉家膏肓ノ  
病ハ氏康タルヘシ但シ風雅ノ道ニ於  
テハ守力心ニ應セズ子細ハ氏康好ム



處十レハコワ夫程ノ達人ナシ左アウ  
 ハ家從ノ輩是ニ慣テ業トスル者多カ  
 ルニシ氏康實ニ良將タラハ一代ハ害  
 ナカラシカ子孫ニ至テ其風移リ弓矢  
 懦弱ニメ鋒先亮ナシ事必定タルヘシ  
 今戰世ノ時ニ遭テ戈ヲ枕トスル折柄  
 禁闕蓬洞ノ翫ヲ事トセシハ武職ノ本  
 意ニ非ス余力門業ノ族ニ於テハ歌曲  
 ノ道嚴ニ禁止スヘシト申サレケルヲ  
 無下ニ無骨ノ事也下詈ル者モ有ケレ

氏是モ理ノ當然ナリト嚙ク人モ侍リ  
 シトシ抑氏康ノ祖父北條早雲庵宗瑞  
 ハ微賤ヨリ起テ勇武ヲ振ヒ竟ニ伊豆  
 國田方郡薤山ノ城主ト成リ明應ノ初  
 ニ大森式部少輔氏頼入道寄栖菴力息  
 男筑前守定頼入道不二菴カ相州足下  
 郡湯坂峠ノ城ヲ陷シ彼一族ヲ鏖メ小  
 田原ニ新城ヲ築テ是ニ移居シ猶大業  
 ヲ志シ未成メ永正十六年八月十五日  
 享年八十八歳ニシテ病死シ其男右京



大夫氏綱繼テ立千度量入ニ勝シ父ノ  
 大志ヲ繼テ竟ニ兩上杉ヲ壓倒シテ關  
 八州ヲ平吞シ扇谷ノ朝興ト武藏野ニ  
 テ大ニ戰ヒ氏綱勝利ヲ得テ江戸ノ城  
 ヲ屠リ捕テ遠山四郎左衛門ヲ城代ト  
 ノ是ニ入置勢威ニ募リ古河ノ御所晴  
 氏ヲ婿トシ是ヨリノ近邦團下ニ從フ  
 事草ノ風ニ靡カ如ク大永七年七月十  
 九日氏綱五十五歳ニ病歿シ其子新  
 九郎氏康相繼テ家領ヲ繼シトナリ

天文十三年甲辰年

五月大

○九日五畿七道洪水陸地ニ船ヲ浮フ

參州ノ民家悉ク漂蕩シ人畜多ク没死ス

八月小

御高祖父 德川出雲守長親

君享年七十二歳ニ卒シ玉ヲ掉舟院一

閑道閣卜謚號ス

○水野右衛門大夫忠政歿後其子下野守

信元尾州愛智郡古渡ノ城ヲ織田備後守



信秀ト合體シテ駿州ノ今川ニ敵對ス  
廣忠君ハ素ヨリ今川治部大輔義元ノ附庸  
庸夕シシ故是非十ク室家ヲ離別メ其元  
下野守信元カ方ヘ送リ歸サント議シ玉  
フ所ニ夫人頃日不豫ノ事アリ是ニ依テ  
酒井雅樂助正親甚歎息シ 廣忠君ニ告  
テ暫ク我宅ニ寓居トサシメ療養シ奉ル  
此時酒井河内守家次元臣夕リ同雅樂  
助正親相共ニ政ヲ司ル

九月大

○廣忠君ノ夫人病愈テ岡崎ヲ發テ  
時ニ神君僅三歳ニテ岡崎ニ止リ玉フ  
工へ安公ノ悲歎限リナシト云々 御當  
家ノ臣阿倍四郎兵衛定次金田宗八郎宗  
祐淺羽三大夫等廿人 廣忠君ノ命ヲ受  
テ夫人ヲ送リ奉リ信元ノ居城刈屋ノ近  
邊十八町畷ニ至ル時夫人ノ曰我兄信元  
ハ短慮ニメ怒リ易シ吾送リ皈サレ事ヲ  
聞カハ憤ヲ發シ汝等ヲ殺サシ時ニ能拒  
ク氏多勢ニ圍レハ奈何シテ遁レ去事ヲ



得レ早ク吾ヲ爰ニ弃テ岡崎ニ歸ルヘシ  
ト有シカレ岡崎ノ臣假ヒ命ヲ殞スレリ  
屋迄候奉セントイヘリ夫人重テ今既ニ  
廣忠君ニ別ルレ 竹千代君ヲ殘シ置故  
尚岡崎ノ事ヲ忘レス汝等命ヲ全クシ  
竹千代君成長ノ後忠義ヲ竭スヘシ下野  
守ト舅姪ノ好アレハ一度ハ和融アルヘ  
シ今汝等故ナク殺サレテ岡崎方ノ怨深  
クナラハ和平ノ妨トナラシ然ル時ハ吾  
再ヒ 竹千代君ニ見エシ事ヲ得ヘカク

ス爰ヲ以テ今汝等ヲ助ケ歸サント早  
ク輿ヲ弃テ去ヘシト仰ケレハ岡崎ノ士  
廿餘輩或曰十五人稽首メ刈屋領ノ里民ヲ呼  
出シ尔々ノ由ヲ告テ輿ヲ渡シ能々刈屋  
ヘ送り奉ルヘキ旨ヲ含メ涕泣メ去ケル  
カ五六町隔タリシ林ノ中ニ休息シ遙ニ  
窺ヒ見レハ信元ノ旨ヲ受テ水野太郎作  
清久後称左大臣高木善次郎清秀後称主水正其兵  
三百許鎧ノ上ニ胴服ヲ著シ夫人ヲ迎ヘ  
且送リノ族ヲ討捕ント馳來ル躰ヲ見テ



各遁レ歸ル夫人ハ岡崎ノ士疾ニ歸リシ  
 上宣ヒ刈屋ノ城ニ至リ玉ヲ廣忠君夫  
 人ノ妹ハ參州寶飯郡形原ノ松平紀伊守  
 家廣力室夕リ然レ正廣忠君ノ室ヲ離  
 縁シ玉ヲ故家廣其妻ヲ皈シ信元ト義絶  
 ス于時信元怒テ形原ヨリ送りノ郎從三  
 人ヲ害シ奴隸等力疑ヲ悉ク斷テ追返ス  
 爰ニ於テ岡崎ノ夫人賢慮淺カラザル故  
 送りノ士危殆ヲ遁ル事ヲ歎美ス

○按スルニ岡崎ヨリ離別ノ夫人刈屋

十少 麾下尾州知多郡阿古屋ノ郷主久松  
 佐渡守菅原俊勝ニ再嫁シ三男四女ヲ  
 産玉ヲ其長男ハ三郎太郎ト云フ後松  
 平因幡守康元ト称ス次男ハ源三郎勝  
 俊ト稱ス三男ハ幼名長福ト云フ三郎  
 四郎ト改メ後松平隱岐守定勝ト稱ス  
 ○女子四人ノ内三人ハ參州碧海郡櫻井  
 ノ松平與一郎忠政渥美郡二連木ノ松  
 平丹波守康長宝飯郡竹谷ノ松平玄蕃  
 頭家清力室ト十儿

末女六  
早世

廣忠君



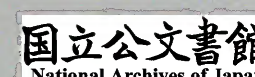
渥美郡田原ノ城主戸田彈正憲光カ娘  
ヲ室トセラル

十月小

○三日 御當家ノ舊臣參州加茂郡高橋  
ノ産米津小大夫 初稱新 勝光卒ス是ハ小  
大夫政信カ父也

○是冬織田備後守信秀ハ當秋 長親君  
ノ喪ヲ傳ヘ聞水野信元カ尾州ニ屬スル  
ヲ幸トシ織田左馬助敏宗ヲ將帥トシ三  
千餘兵ヲ以テ參州碧海郡安祥ノ城ヲ攻

ル 祖考長親君ノ庶弟安祥左馬助長家  
此城ヲ守リ堅ク防戦シ精射平岩十兵衛  
矢ヲ放テ寄手多ク死傷ス大將敏宗モ股  
ヲ傷リ遂ニ尾州勢圍ヲ解テ皈リシカハ  
織田信秀大ニ怒リ躬ヲ兵ヲ督シ參州ニ  
入テ安祥ヲ陷シ直ニ碧海郡佐崎ノ城ヲ  
攻シトス于時當城主松平三左衛門忠倫  
ハ 和泉守信光君ノ孫彈正左衛門昌安  
カ子也ケルカ其志ヲ変テ信秀ニ屬シ同  
郡筒針額田郡渡理兩所ニ砦ヲ設ケ岡崎





ヨ謀ント欲ス是ヨリ諸臣狐疑ヲ生シ歎  
ヲ挫ク術ヲ失フカ如シ 廣忠君モ唯岡  
崎ヲ守リ防戦ノ備ヲナシ玉フ折柄 御  
當家ノ元老酒井將監忠尚ト同姓河内守  
家次同雅樂助正親石川安藝守清兼確執  
ヲ生ス將監折ヲ得テ 廣忠君へ清兼家  
次權ヲ恣ニシ奸曲アリ渠等ヲ放逐シ玉  
ハ々羣臣一致ノ忠ヲ竭サン由ヲ訴フ然  
レモ忠尚カ讒諛タル事ヲ知テ肯ヒ玉ハ  
ス却テ忠尚カ奸謀ヲ恣メラル將監叔然

トノ退ケルカ 廣忠君ヲ恨ヘキニ非ル  
ヲ以テ暫ク蟄居スト雖遂ニ出仕ス清兼  
家次正親ハ君ノ為ニ私ノ怨ヲ隱シ忠尚  
ト等閑ナク共ニ公務ヲ沙汰ス  
○松平記ニ曰酒井左衛門尉忠次ハ  
廣忠君ノ妹婿タリシカ大原左近右衛  
門今村傳次郎トモ岡崎ノ城ニ登リ  
石川清兼酒井家次ヲ擊ント請フ  
廣忠君許シ玉ハスシテ三人退去シケ  
ルカ大原今村ハ城門ノ衛士ト口論シ



是ヲ撃テ佐崎ニ往テ三左衛門忠倫ニ屬

十一月大

○三日 旧臣渡邊甚五郎長綱享年五十

歳ニシテ卒ス是ハ清兵衛有綱カ子ナリ

○本朝軍器考ニ曰大内太宰大貳義隆

卿カ大明國ヘ進貢第三ノ船難風ニ放

タレ大隅ノ種子島ヘ至テ日和ヲ待テ

帆ヲ開ク時ニ島主兵部丞時堯カ郎從

番夷ヨリ火炮ノ術ヲ傳ヘシ松下五郎

三郎便船ニ中華ニ渡ル此船遂ニ歸帆

ノ時又逆風ニ放タレ豆州ニ漂著シ五

郎三郎彼技術ヲ北條左京大夫氏康ノ

諸士ニ是ヲ傳フ是ヨリ關東ニ銃炮流

布スト南浦文集ニ見ユル鎮西スウ去

年ヨリ彼術漸ク傳來スル所甲陽軍鑑

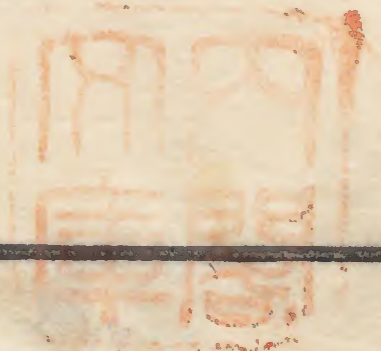
ニハ大永六丙戌年武田家ヘ是ヲ傳フ

北條五代記ニハ享祿元戌子年紀州根

來ヨリ相州ヘ傳來スト九州記ニハ同

三庚寅年豐後府内ヘ蕃船入津シ大伴





家へ鑊炮ヲ授ク天文廿辛亥年同シ蕃  
 船並岸シ石火矢ヲ傳フト云事悉ク信  
 難シ異國船豐府へ入津ノ事ヲ詳ニ  
 著ス大友ノ家記ニ右西度ノ所見十三  
 天正四丙子年南蠻ヨリ宗麟力領内肥  
 後へ大石火矢ヲ渡ス是ヲ國前同十壬  
 午年南蠻ノ商船入津シテ石火矢ニ挺  
 ヲ宗麟ニ贈ルト云事慥十ルへシ其外  
 臆説多シ信スルニ足ラズト云フ  
 是ヲ以テ愚按スルニ參州ニ火炮流布

スル天文ノ末カ弘治ノ始十ルへシ  
 天文十四乙巳年  
 ○今春廣忠君安祥ヲ敵ニ獲ラレ刺織  
 田方へ内應スル者徃々出来ル故參河國  
 中ヲ鎮ント其兵僅千餘騎矢矯川ヲ涉テ  
 陳シ玉ヲ尾州勢吾兵ノ寡ヲ侮テ行伍ヲ  
 整へス宝飯郡清田ノ畷ヨリ進テ防ギ戰  
 二利ヲ失フ大廣忠君ノ部下本多吉  
 左衛門忠豐等勝ニ乘ノ是ヲ追撃ス大久  
 保忠政後改阿倍四郎敵ヲ射殪ニ父新八郎

卷之二  
 十六  
 豊田國



忠俊其首ヲ得夕リ其外首十級ヲ斬獲シ  
清田ノ啜ニ臨ム時ニ織田信秀後援トノ  
多クヲ發ス城兵大ニ力ヲ得テ突テ出相  
戰ヲ吾兵疲勞ノ危シ本多吉左衛門諫テ  
曰速ニ兵ヲ岡崎ニ班シ重テ謀ヲ回ラシ  
當城ヲ攻玉ヘ然レ臣敵後ヲ躡テ退キ玉  
ヲ事難カルヘシ苟クモ臣ニ御馬標ヲ賜  
ハラハカヲ竭シ戰テ君ノ為ニ死スヘシ  
ト云々廣忠君是ヲ許シ玉ハス忠豊頻  
ニ諫メ遂ニ扇ノ御馬標ヲ得テ清田ノ啜

ニ馬ヲ反シ其兵三十騎ニテ暫ク敵ヲ拒  
キ主從皆戰歿ス此間ニ廣忠君ヲ始メ  
諸軍悉ク引取畢又忠豊力忠死君臣臣ニ  
憐惜斜ナラスト云々

○福釜松平家傳ニ三郎次郎親俊此時  
弱年ニメ軍功アリ廣忠君是ヲ賞メ  
汝モ亦勇銳其父鎗三郎次郎ニ劣ルヘ  
ラスト宣フ  
○井松平家傳ニ彌九郎忠次此時功  
ヲ竭スヲ以テ額田郡伊田羽根兩郷ヲ



賜ル

○此代實録ニ扇ノ御馬標ハ本多忠豊  
 死ノ後尚其嫡子平八郎忠高力家ニ  
 捺物トシ相傳フ忠高モ戰場ニ命ヲ殞  
 シ其子平八郎忠勝力時永祿ニ己未年  
 神君ノ仰ニ依テ扇ノ御馬標ヲ再ヒ  
 返上シ御當家永ク是ヲ用ヒ玉フト  
 云々

○碧海郡櫻井ノ松平内膳清定ハ其父信  
 定昔年御當家ヲ傾ント企テ其事成ラ

スノ廣忠君ニ降ルト雖御憤今以曾臆  
 ニ貽ルヘシ信定既ニ死シ祖考長親君  
 去年卒去セララル故廣忠君此弊ニ乘シ  
 櫻井ノ家ヲ攻亡サルヘキカ是ヨリ先レ  
 ノ兵ヲ起サントテ同郡上野ノ城ニ據テ  
 防拒ノ備ヲ成ス酒井將監忠尚是ニ黨シ  
 上野ニ加ハリテ廣忠君ニ叛ク故岡崎  
 ヨリ上野ニ御旗ヲ進メラル于時清定兵  
 ヲ一人モ發セス吾兵ノ城下ニ來ルヲ待  
 テ擊ルト相謀ル所ニ味方ハ其籌畧ニ陷



リ敵ヲ侮リ急ニ城ヲ圍ム其時城ノ二箇  
 所ノ木戸ヲ開キ鋒ヲ揃ヘ突出ル故寄手  
 忽敗績シ手負死スル者數十人且河水ニ  
 溺レ命ヲ殞ス者若干也植村出羽忠政  
 防山号キ戦フ故吾兵多少遁レ退ト云々  
 三月大

○九日御當家ノ舊臣岩松八弥ハ瞎目  
 十ニ故時ノ人片目八弥ト稱ス隣國ノ敵  
 二内應ニ岡崎城中廣忠君ノ寢室ニ入

千子村正ノ脇指ヲ以テ犯シ奉ル所突損  
 シ御股ヲ傷ヒ八弥營中ヲ走ル廣忠君  
 御刀ヲ拔テ是ヲ追玉フ城中動揺シ八弥  
 逆心ノ君ヲ刺テ逸ルト呼ハル刻ニ植村  
 新六郎家政後稱出羽守登營シケル力此敵ヲ  
 聞時ニ城門橋際ヘ八弥逸来ル故家政引  
 組テ堀ノ中ニ陷ル所ニ碧海郡械木ノ松  
 平藏人信孝馳来リ鎗ヲ揮テ堀端ニ立テ  
 八弥ヲ放ツヘシ吾渠ヲ刺殺サント云ヘ  
 川新六郎力曰大逆ノ徒也是ヲ放テ遁レ



去ラハ後悔ス所益有一シ唯家政ト共ニ  
突ルヘシ臣死ス所恨ナカラント答フ信  
孝工夫ヲ凝シ是ヲ窺フ間ニ新六郎遂ニ  
八弥カ首級ヲ得タリト云々世ニ新六郎  
ヲ勇銳ノ義士ト称シ廣忠君モ亦感深  
ヲ授ケラル植村家政ハ出羽  
守忠安カ子也

○松平記等ニ曰岩松ハ新田ノ庶流父  
リハ弥常ニ昵近ノ且軍功度々也是ヨ  
リ嚮亂心セシニヤ罪ナキ家僕ヲ害シ  
婦女ヲモ殺サントシケルヲ逸去テ難

具ヲ遁ル剩ハ弥酒ヲ好テ今日成道山大  
樹寺ニ於テ遠キヲ追フ佛事ヲナシケ  
ルカ過酒沈酔シ直ニ登城メ君ヲ犯ス  
ニ至ル一子有テ誅セラル且孫アリテ  
是モ歿ニ就ントシケルヲ廣忠君慈  
仁ニメハ弥力度々ノ戦功ニ賙セラレ  
且渠亂心酔狂ノ致ス所ナルヲ以テ然  
モ其孫幼稚ナレハ命ヲ助ケ武門ヲ避  
テ源家桃井ノ庶流幸若小八郎トイヘ  
ル舞大夫ノ門弟トナシ至フ故遂ニハ

卷之二  
二  
畫中園藏



師ノ苗字ト己カ苗字ヲ兼用イテ幸岩  
 與大夫ト稱ス其子幸岩與惣大夫ハ  
 御當家曩祖以來ノ事及ヒ參州諸士ノ  
 由緒ヲ委シク記臆スルヲ以テ後年  
 台徳公渠ヲ御咄衆ノ末席ニ加ヘラレ  
 舞大夫ヲ免除有テ難疑シ真齋ト號ス  
 五月大  
 ○五日内藤三左衛門信成生ル後豐前  
 守ニ任テ江州坂田郡長濱ノ城主タリシ  
 是十川實八島田久右衛門景信力次男ト

稱シ十カウ廣忠君ノ御落胤ト云々  
 天文十五丙午年  
 三月小  
 ○十日長澤ノ松平孫三郎信重年来水  
 野下野守信元ト芝蘭ノ朋タリシカ渠織  
 田家ニ屬スルヲ以テ信元ト交ヲ斷テ  
 廣忠君ヘ益忠ヲ竭ントスル故甚感セラ  
 レ采邑ヲ賜フ

今度世と統中事ある等用統本  
 少處山由大末福領之内長福寺  
 以進進



尚於末代不可相遠者也仍如件

天文十八

三月十日 廣忠

松平孫之部及

七月小

廿日 關東兩上杉山内兵部少輔憲政

扇谷修理大夫朝定八万ノ兵ヲ率以北條

左京大夫氏康ノ持分武州入間郡川越ノ

城ヲ累日圍之攻ル城中ニ八北條左衛門

大夫本氏綱成且援將北條長綱入道幻菴

等究竟ノ士卒三千餘人粉骨ヲ竭シ防戰

ス英雄ノ氏康武略ヲ運ラシ豆相兩國並

ニ武州半國ノ勢八千ヲ引卒シ今午ノ刻

兩上杉力砂窪ノ陳ヲ破リ兩將ノ内朝定

ヲ始メ銳兵三千雜兵若干ヲ討捕ル

註世二天文十三甲辰年四月廿日川越

夜軍卜傳フ然シ任彼夜戰ハ天文六丁

酉年七月十五日氏康ノ亡父相模守氏

綱川越城ノ後詰シ扇谷朝定ノ大兵ヲ

破ル凡川越ニ於テ北條父子兩度上杉



家ノ猛勢ト闘ニ大ニ勝利ヲ得テ式威  
逐日奮入ト云々

○參州碧海郡械木ノ松平藏人信孝ハ  
廣忠君ノ伯父ニシテ且勲忠有テ鍾愛斜十  
ラサル所ニ同郡岩津人松平太郎親長ハ  
長親君ノ庶兄ニシテ信孝ノ大伯父タリ  
シカ歿メ後嗣ナケレハ信孝岩津ヲ合領  
ス又幾程ナク信孝ノ弟同郡三木ノ松平  
十郎三郎康孝卒去シ是ニ嗣子ナケレハ  
信孝其領邑ヲ押領スト雖廣忠君ハ信

孝往年ノ大忠ニ依テ是ヲ許シ置レ又爰  
ニ岡崎ノ老臣ノ内阿倍大藏定吉カ子弥  
七郎去ル天文四乙未年清康君ヲ弑シ  
奉ルト雖此事定吉ニ於テ罪曾テナキノ  
證據分明タル故今以テ岡崎ノ政務ヲ執  
スル所信孝以為假令大藏其科ナク正  
シク其子大犯人タル上ハ廣忠君是ヲ  
退ケラルヘキ事也ト常ニ誹ル由ヲ傳ヘ  
聞テ大藏大ニ憤リ酒井家次同正親石川  
安藝守清兼本多平八郎忠高忠勝カ植村出



羽守忠安等卜胥議シケルハ昔年櫻井ノ  
 松平故以膳正信定領知次第ニ増益シテ  
 其威ニ募リ遂ニ岡崎ノ讐ト成リシ先蹤  
 遠カラス今信孝功有トイヘ氏兩家ノ采  
 邑ヲ合セ岡崎ノ御領ニ均シ恐ラクハ  
 御當家ヲ傾ルニ至ラン時ヲ窺ヒ信孝ヲ  
 放逐シ後ノ憂ヲ除ント謂ケレハ同職四  
 人モ志ヲ同クノ其事ヲ相謀ルト云々  
 九月大  
 ○六日ノ廣忠君再ヒ松平内膳清定力上

野ノ城郭ヲ攻ラルヘキ為ニ岡崎ヨリ兵  
 ヲ發シ玉フ于時命有テ曰去春吾軍敵  
 ヲ侮リ大ニ敗ル々ヲ以テ敵今甚誇ルト  
 云ヘリ是味方勝利ヲ得ヘキ端也先鋒城  
 下ニ迫リ関ヲ發セハ清定忽突出ヘシ其  
 時總軍ヲ進メ撃タハ必城兵ヲ大ニ挫キ  
 多分清定ヲ虜ニスヘシト宣フ故吾軍其  
 制令ヲ守リ餌兵ヲ城下ニ進メ鯨波ヲ發  
 スル所果メ内膳衆ニ先ニシ衝テ出岡崎  
 ノ弱兵何ソ吾鋒ニ當ラシヤ一戦ニ敵ヲ



拉クヘキ旨頻ニ從軍ヲ勵マシ奮ヒ闘テ  
寄手ノ先鋒敗北シケレハ清定競ヒ進テ  
頻ニ追撃ス吾兵金田惣八郎宗祐中根甚  
太郎後殿シ忠死ヲ遂ル 廣忠君ハ敵既  
ニ吾謀ニ陥ルヲ見澄シ奇兵ヲ以テ是ヲ  
擊玉フ渡邊源五左衛門高綱先登メ鎗ヲ  
合ス清定カ備大ニ敗レ悉ク城中ニ逃入  
吾兵討捕首數十級ニ及ヘリ 廣忠君岡  
崎へ凱旋シ玉フ其後清定並ニ酒井將監  
其勢ヒ盡テ軍門ニ降ル爰ニ於テ清定ヲ

櫻井ニ歸シ上野ノ城ニ將監ヲ入置ル  
○今秋久松佐渡守俊勝鄰境ノ敵大野氏  
佐治氏ト和ヲ整フ其所謂ハ俊勝カ祖父  
肥前守定益尾州知多郡阿古屋ノ城ニ在  
テ彼両氏ト鉾楯ニ及ヘリ隣境ノ争夕ル  
故軍不意ニ發スル時ハ烏兔山ニ登リ鐘  
ヲ鳴シ螺ヲ吹テ急ヲ告レハ定益カ叔父  
水野右衛門大夫忠政ハ川屋ヨリ發シ小  
川四郎右衛門ハ小川ヨリ馳至リ久松ヲ  
救ヒ戰フ又川屋小川ヨリモ急ヲ告ル時



ハ阿古屋ヨリ馳著テ援ヒケル當時俊勝迄三世既ニ大野佐治ト挑ミ争フ處今度遂ニ和融シ俊勝力子彌九郎定員ヲ佐治力婿トス此定員ハ俊勝力前妻ノ産ル處ニメ康元勝俊定勝等トハ異腹ノ庶兄也

十月大

○十二日 吾兵設樂郡野田ノ管治織部定村ヲ攻ル于時功臣杉浦弥一郎親貞三十一歳ニメ戦歿ス此時定村ハ尾州方ナリ 十二月大

○廿日 足利源義藤征夷大將軍ニ補也  
ラ  
○註 義藤後義輝ト更ム實ハ此時洛陽ヲ

避テ江州坂本樹下某ト云ヘル日吉ノ祠官力宅ニ寓居シ玉フ

○是年長澤ノ松平上野介政忠力子源七郎生ル後上野介康忠是也母ハ 廣忠君ノ御妹ニテ後年政忠戦死メ酒井左衛門尉忠次ニ再嫁セラレ吉田殿ト稱ス  
附考メ云今茲八月北條氏康緯ヲ小鷹



狩ニ寄テ小田原ヲ發シ武相ノ領内ヲ  
巡見シテ歸城有シカ其間ノ事自記セ  
ラレシ一卷アリ左ノ如シ

武藏野道之記

平氏康

天文十三年仲秋乃以武藏野を身見録と  
す此録月拾日ひまらぬれ事なれ録  
人への内しうちつれ小島狩して河内  
定てこれく物れ此録末し馬よすの

おのり總念におうてこれれしと那し乃  
言跡をたりのえ八幡山より四方に掌した  
なるめ小珠大珠を見たりは小鶴やあそめ  
波よきもらさくを見たり

おのり鴨れきを川さる浪乃波邊より

おのりおれ見るえを袖にけしや

大珠乃が舟ちをわけてゆく船と

うき母をわさるるささるん

るあ一度子の年宿願の事あそ此文よ

おのりさるきさるやうく八務あゆりや





なりぬらんまゝに傳ふ所宮乃おまのまありて  
たれまゝく身まのぬれ八堵山

祈る契は海門よまありて

さてあかしくは谷之山に由のの濱の太  
居首寺古法なる見明れ縁澤北小松井乃  
庄より山田彈正忠正宗指西に一本を  
てゆくに是照んじまらぬれ縁中より

きののまをもちまらぬれ縁の彼  
いふたぐゆん夕とれ乃 縁

此八月と旬物雲ゆくわけ入る縁に山

何りいと山やゆふたれ山乃うし海軍  
の山峰わきちちぬれ中申侍る我れなり武流  
乃國勝沼やゆ新よつまお藤加賀者  
安元は西れ領主ちりつ縁く道に事申  
かよひくは山海乃好相数をつる一養  
恋しける此西に二日道首くまはれ  
よるし武藏野をまかりゆまのまにゆけ  
もそののち片く我れ獲すた女所形れ露ふ  
屋をいふむしの群くわつれを信ん  
ちのりたり









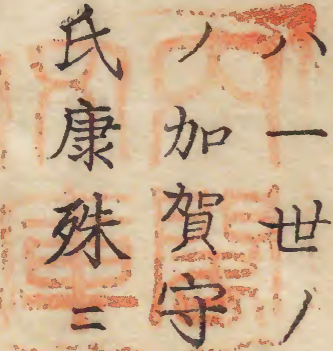
去より一宿すたれし申すは八河字  
たりぬれ幸に坊てやとすは松風  
入風もやと吹きより松風入翠中  
中事をおりひ出さす

松風れゆき辞まげと書きす

志す世とれ子考と拙記を録

明八八約を初免ゆらん中をくむれ  
るより中よりくむれゆきはゆき  
事より日教のそりきくむれ中ゆき  
そ那りぬ小回るるそりきくむれ

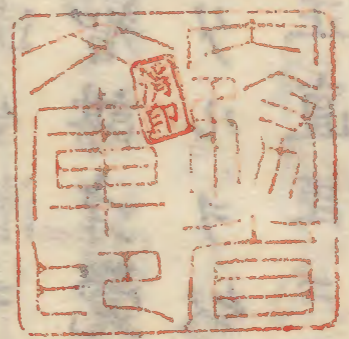
件ノ紀行ノ中ニ齋藤加賀守ト書シタ  
ルハ其父加賀守武州ノ太田左金吾入  
道々灌ニ仕ヘテ馬回リノ士タリシカ  
智謀才覺アリテ軍旅ノ故實鍛鍊ノ者  
タルヲ以テ持資入道没後ニ扇谷ノ定  
正直臣ニ加ヘテ遂ニ武者奉行ニ補シ  
團扇ヲ預ケラレタリサレハ一世ノ戰  
功廿餘度ニ及ヒシトワ今ノ加賀守安  
元モ亦能父ノ業ヲ傳ヘテ氏康殊ニ懇  
遇有シト云ヘリ





卷之...

三州... 畫中... 臣...



Faint vertical text columns, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

